ひたちなか市埋蔵文化財調査センター　2023. 秋

ひたちなか 埋文だより 59

虎塚古墳の壁画確認！　1973 年 9 月 12 日，扉石が開かれ，予想もしなかった壁画が現れます。当時の調査日誌には，つぎのように記されています。「午前 10 時から石室開扉が調査団によって予告されていたために，多数の市民が見学に訪れる。市民および報道関係者の見守る中で，午前 10 時に開扉作業に入る。扉石はすっぽりと玄門に納まっているために，作業は思うようにはかどらない。10 時 50 分，玄門開く。先頭の調査員より「壁画だ！」の第一声。大塚初重団長より，つめかけた市民にまず壁画発見の報告がある。静寂は東中根台地に大きなどよめきと拍手がおこる。現場は，かなりの興奮状態となる」。2023 年はその感動からちょうど 50 年となります。　(1973年9月)

CONTENTS

資料紹介　**奈良・平安時代の竪穴住居跡の分類と消長**　（佐々木義則）

調査報告　**ひたちなか海浜古墳群出土の人骨（1）**（梶ケ山眞里）

「私的茨城考古学外史－遺跡・人 出会いと別れ－」　第8回　発掘三昧への道　県外編3　（瓦吹 堅）

十五郎穴横穴墓群が国の史跡に指定となる見込みです！

横穴墓を歩く㉚　**石貫ナギノ横穴群**　（末永 崇）

ワンケース・ミュージアム 58　**縄文時代の貝輪**

遺跡めぐり　**いばらきの古墳探訪**

ワンケース・ミュージアム 59　**発見！「大舎人小文」墨書土器**

のぞき見、展示室⑥　**貝塚出土の貝刃**

ほか

奈良・平安時代の竪穴住居跡の分類と消長

佐々木 義則

ひたちなか市原前遺跡の発掘調査（1996 年）

ひたちなか市では，発掘調査によって多数の奈良・平安時代の竪穴住居跡が見つかっています。そうした住居跡がどのような構造であったのかを考えるため，市内で調査された住居跡について，柱穴のあり方や大きさによって分類し，その移り変わりについて整理してみました。

Ⅰ　上屋構造について

上屋構造の二つのモデル　奈良・平安時代の竪穴住居跡の上屋構造について、近年の研究としては浅川滋男氏・宮下孝優氏・君島武史氏等の成果が挙げられる［浅川二〇一三、宮下二〇一六、君島二〇二〇］。宮下氏の論文では、東京都の武蔵国府関連遺跡の住居跡をもとに、上屋構造のモデルとその変遷の概要が整理されている。そこで提示されたモデルのうち、「四本主柱穴・伏屋式」と「無柱穴・伏屋式」が、主柱の有無による上屋構造の違いをわかりやすく示されているので（図1）、本稿ではこの二つのモデルを、奈良・平安時代の竪穴住居跡の上屋の基本的な構造とみることにしたい。

ひたちなか市の焼失住居跡　ここでは参考資料として、ひたちなか市から出土した焼失住居跡である、西塙遺跡九一号住居跡・三一〇号住居跡、原前遺跡三号住居跡などの炭化材出土状

図１　竪穴住居の上屋
（上：しもつけ風土記の丘資料館復元家屋，1992 年撮影
下：宮下孝優 2016 より引用・改変）

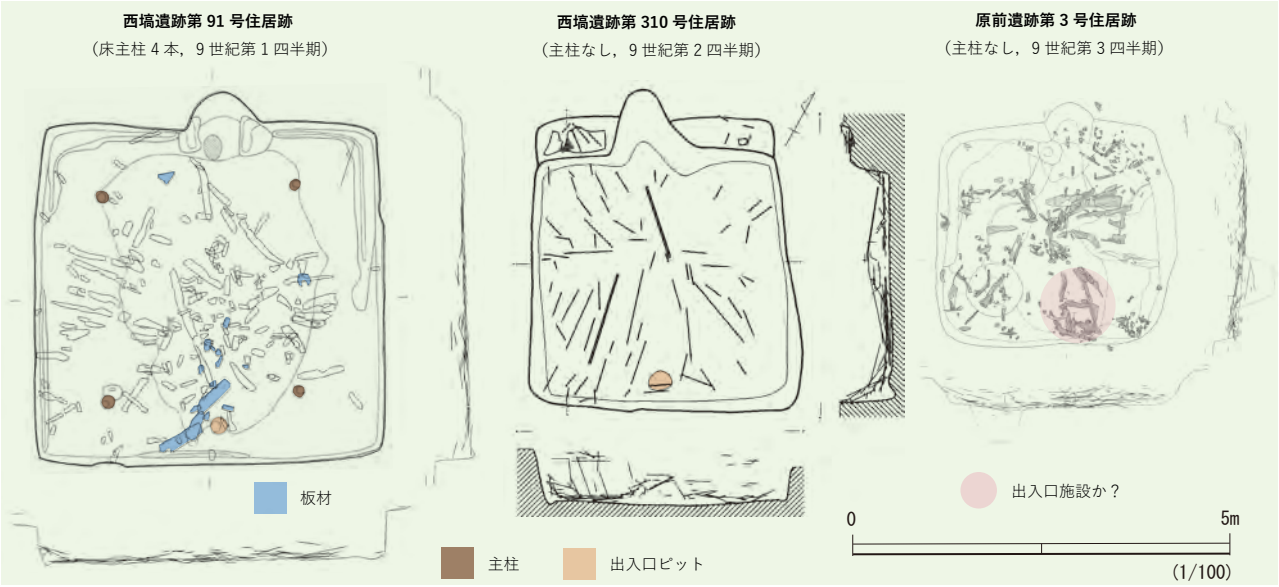


図２　武田遺跡群の焼失住居跡

表１　ひたちなか市における奈良・平安時代竪穴住居跡の時期別出土数

主柱による分類	支柱による分類	竈位置	面積（㎡）	７世紀	８世紀				９世紀				10世紀				11世紀			
				第４四半期	第１四半期	第２四半期	第３四半期	第４四半期	第１四半期	第２四半期	第３四半期	第４四半期	第１四半期	第２四半期	第３四半期	第４四半期	第１四半期	第２四半期	第３四半期	第４四半期
床主柱4本	主柱間支柱・床中央支柱	北	101, 102	1	1															
	床中央支柱	北	71		1															
	壁支柱・竈脇支柱	北	21，67		1			1												
	出入口支柱	北	31			1														
	壁支柱・床中央支柱	北	30								1									
	支柱なし	北	11～71	4	8	14	9	10	9	7	3	1	1							
		東	14，17				1								1					
		西	19			1														
床主柱2本・壁主柱（竈側，直立）2本	壁支柱・床中央支柱	北	28				1													
	床中央支柱	北	22						1											
	支柱なし	北	22，29						1		1									
		東	21							1										
床主柱2本・壁主柱（竈側，傾斜）2本	床中央支柱	東	22							1										
床主柱2本・壁主柱（竈対面側，直立）2本	支柱なし	北	19						1											
床主柱2本・壁主柱（竈対面側，傾斜）2本	支柱なし	北	16						1											
壁主柱（傾斜）4本	支柱なし	北	15，20			1			1											
主柱なし	壁支柱	北	16，25		1						1									
	壁中央支柱2本	北	19				1													
	床中央支柱	北	10, 19							1		1			1					
		東	19													1				
	床支柱2本	東	13											1						
	竈脇支柱	東	8													1				
	壁支柱・床支柱2本	北	9															1		
	支柱なし	北	4～25	2	4	10	12	16	18	34	26	9	5	5	2	2	1	2		
		東	6～26				2	4	4	8	7	1	5	3	8	7	4	3	1	1
		西	4～14			1	1				1	1						1		
		南	10												1					

況をみてみたい。主柱穴をもつ西塙遺跡九一号住居跡では、主柱や桁（けた）と推測できる部材が明らかではないが、壁際から内側に向かう垂木（たるき）の残存や、南側出入口付近における板材の分布など、構造を示唆する要素も見て取れる。垂木が放射状に残存する様子は他の二例も同様である。また原前遺跡三号住居跡では、南側中央部に出入口かと思われる部材がみられる。

今後、このような焼失住居の良好な事例が増えていくことで、竪穴住居跡の上屋構造がしだいに明らかになっていくことを期待したい。

Ⅱ　柱穴による住居跡の分類

主柱の有無　次に柱穴のあり方をもとに住居跡を分類してみたい。

竪穴住居跡は主柱穴の有無により大きく二分されるが、それらは図１のように上屋構造が異なるとみられる。

表１によると、八世紀と九世紀は、床主柱（ゆかしゅちゅう）が四本あり支柱がない住居と、主柱・支柱がともにない住居を主として、集落が構成されている。それが一〇世紀になると、主柱をもつ住居がなくなり、主柱・支柱がない住居跡を主とするようになっていく。

主柱をもつ住居は中型～特大型住居に多く、主柱を持たない住居は小型住居に多い。そのため図４のように中型～特大型の住居が九世紀でほぼ消えるのに合わせて、主柱をもつ住居も九世紀でほぼなくなるのである。

壁主柱をもつ住居　また、壁主柱（きしゅちゅう）をもつ住居が九世紀前半に目立つことも注目される。これは、その頃に生じた住居面積縮小の動向に対して、柱を壁際に寄せて床を広く使えるようにしたのであろう。九世紀前半以外の時期における同構造の住居も目的は同じと考えられる。

壁主柱には傾斜するものもみられるが、それは主柱のある住居とない住居の折衷的な上屋構造であったのかもしれない。

主柱をもつ住居と集落構造　主柱をもつ住居は、主柱をもたない住居と比べて堅牢な造りであり、図１のように外観から区別できるものであった。八・九世紀の集落では、面積のやや大きな住居が住居群の中心的住居であったとみられるが、そのような住居は主柱をもつことが多

い。主柱をもつ大きな住居の周辺に小型住居が形成されて住居群を形づくる集落構造の遺跡も多くみられる。九世紀後半頃からはこうした集落構造が変化し、堅牢な大・中型住居が消え小型住居のみで構成される集落が多くなる［佐々木二〇一〇］。そして一〇世紀以後になると、古墳時代以来続いてきた主柱をもつ住居はほとんどみられなくなるのである。その理由は集落を形成する住居群（家）の自立的経営の後退による集落構造の変化が背景にあると考えられよう。

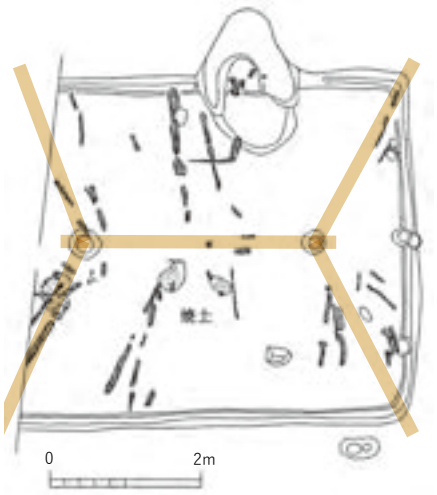


図３　栃木県辻の内遺跡１号住居跡
（菱川 2008 より引用，茶色は棟木・隅垂木の推定）

主柱をもたない住居の構造　主柱をもたない住居跡には、側壁中央支柱や床中央支柱・床二本支柱などもみられるが（図6）、それらの支柱は上屋の棟木（むなぎ）を支えたものと思われる。床二本支柱をもつ焼失住居跡である栃木県辻（つじ）の内（うち）遺跡一号住居跡（平安、図3）［菱川二〇〇八］の炭化材出土状況をみても、図1のような住居構造が推測できる。

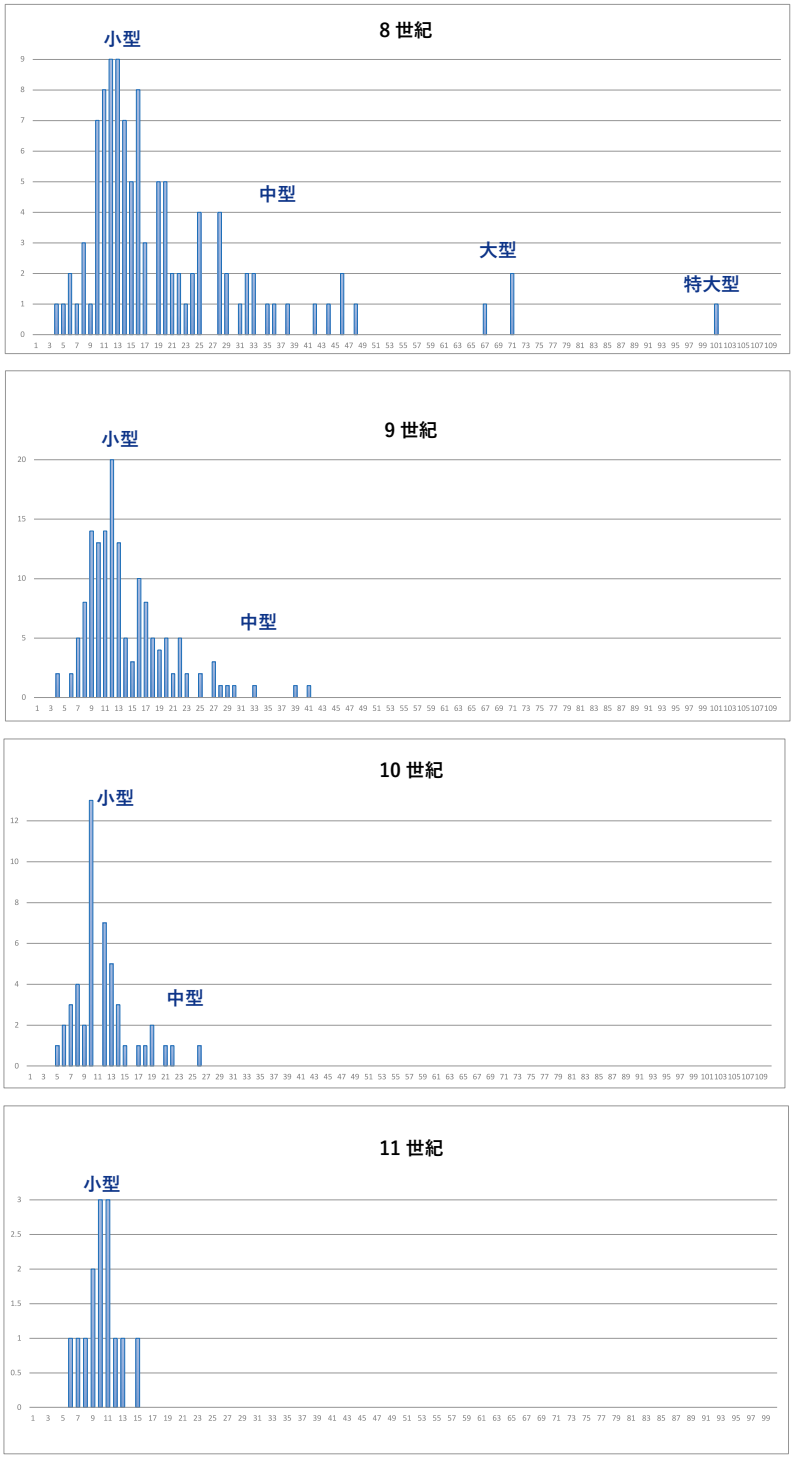


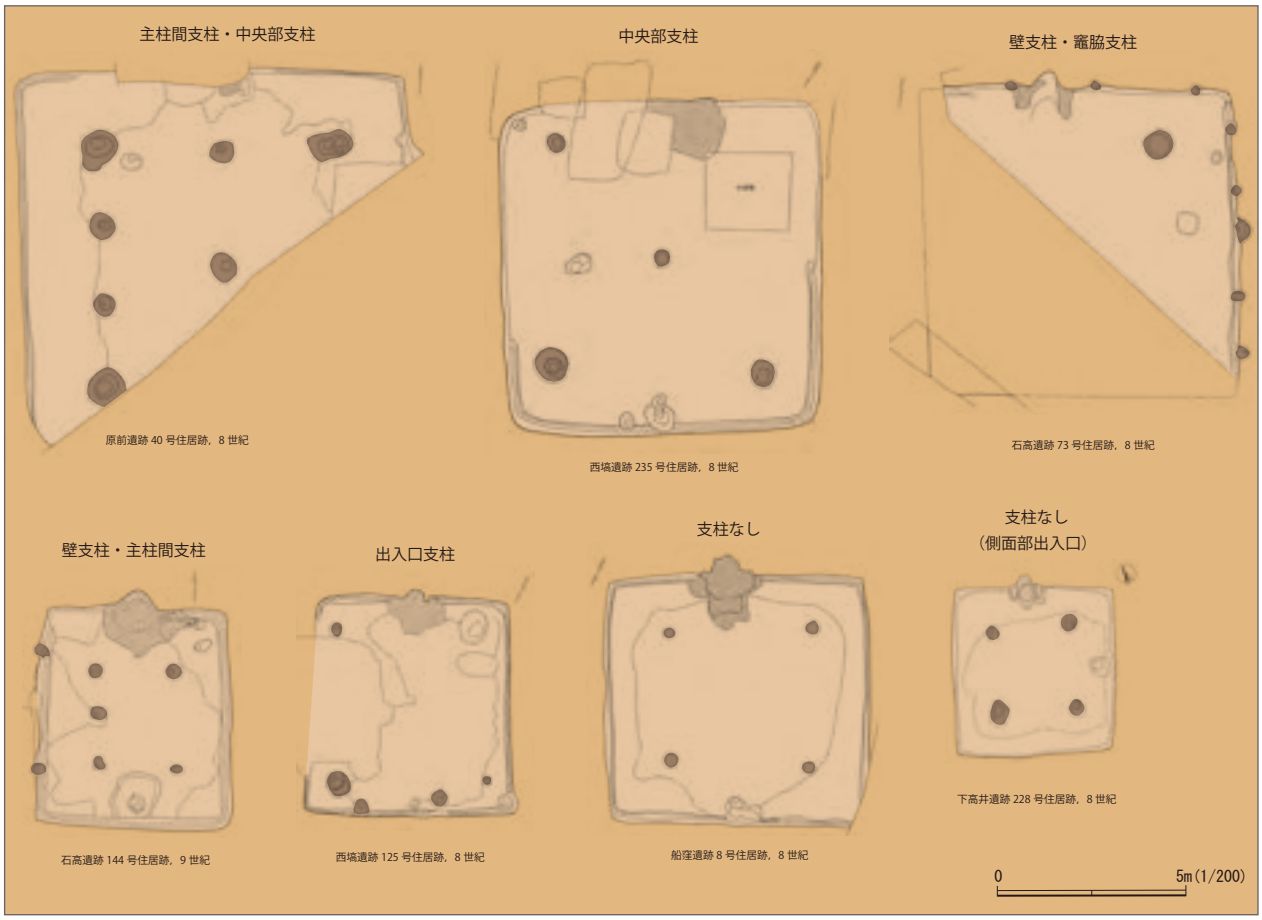
図４　ひたちなか市における竪穴住居跡の規模の変遷（縦：基数，横：面積㎡）

Ⅲ　竈の位置

北竈から東竈へ　最後に住居跡の竈の設置方向について考えてみたい。表1をみると、竈の位置は北壁に設置される北竈が多いが、主柱をもたない住居跡では東壁に設置される東竈が一定量存在していることがわかる。「主柱なし・支柱なし」の住居の場合、八世紀後半頃から東竈がみられるようになるが、九世紀までは北竈が東竈よりも多い。それが一〇世紀に入ると東竈が北竈と同じかそれ以上の割合を占めるように変化するのである。

竈の向きと風向き　君島武史氏は、竈の向きと風向きについ

床主柱４本



床主柱２本・壁主柱２本

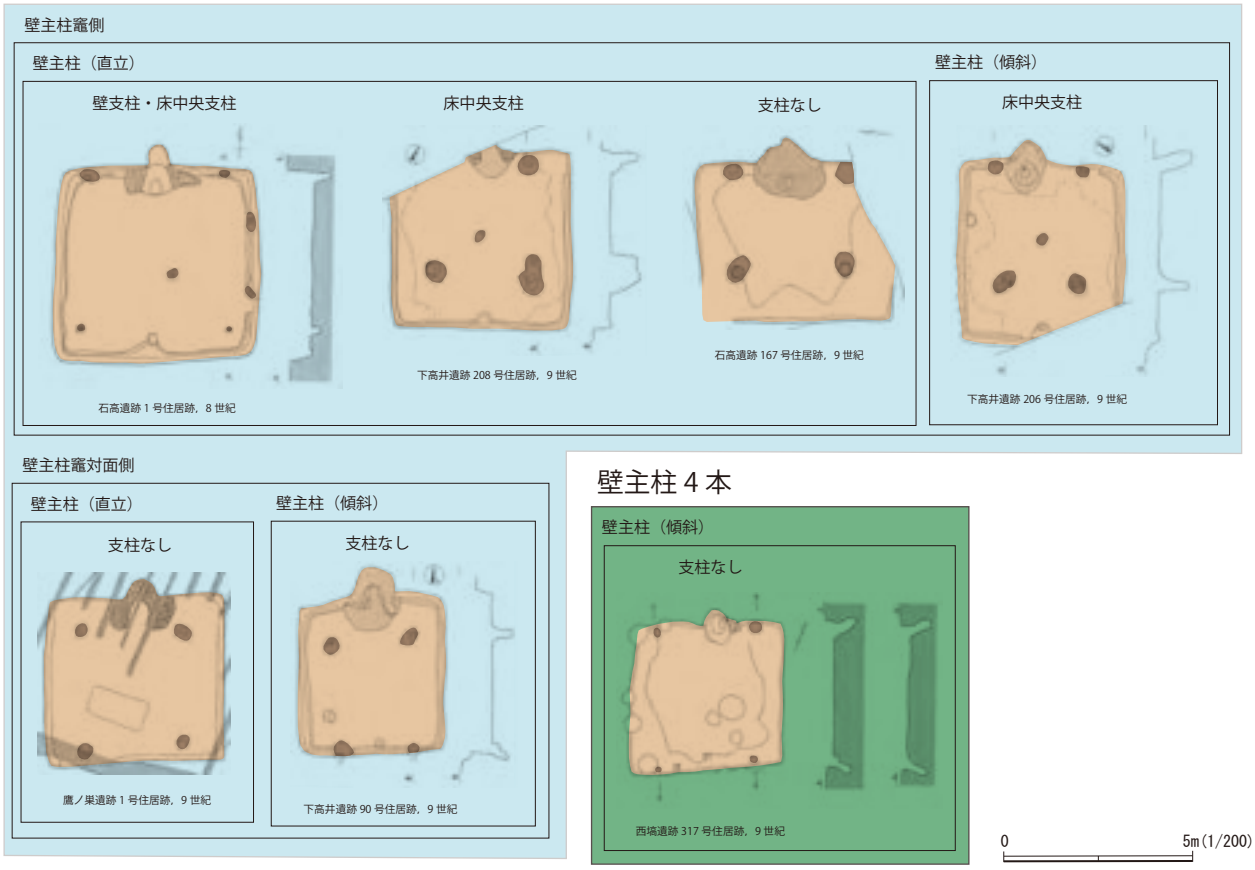


図５　ひたちなか市の奈良・平安時代竪穴住居跡の分類（1）

主柱なし

図 6　ひたちなか市の奈良・平安時代竪穴住居跡の分類（2）

て、気象庁による風向きの観測データを利用し、「煙出からの排煙が建物本体に被ることを避けるためにカマド設置壁の方位が決められている」［君島二〇二〇］と結論されたが、これは重要な指摘である。

試しに気象庁のサイトで、水戸市の一九九一年から二〇二〇年までの三〇年間の月ごとの最多風向のデータをみてみると、五～八月が東寄りの風が多く、九月～四月は北寄りの風が多いことがわかった。そのデータによれば、ひたちなか市域で竪穴住居を建てた場合、東竈にすると夏季は室内に煙が逆流することが多くなると想像される。ただし北竈にすると、暖房等で火を使う時間が長くなる冬季に、北風による逆流が多く生じることになるだろう。住居が小さいと竈からの煙の逆流の影響は大きく、火の粉が飛んで火事の恐れも生じる。したがって狭い住居の場合は、冬における竈の使用頻度を考慮し、東壁に竈を設置することがより適していたと考えられるのである。

採光と住居方位　ところで中型から大型の住居は、採光のため南側を出入口にすることが最も適しており、出入口から差し込む光が届く北壁にカマドを設けた方が、炊事等の室内作業にとって都合がよい。主柱をもつ大型・中型の住居（図5）の多くが北竈であるのは、そうした理由であったのだろう。竈を北に配置した場合、煙突を高くすることで煙の逆流を防いだ可能性も考えられる。

なお九世紀までは、集落の中心となる大型・中型住居と小型住居が共存することが多く、大型・中型住居の建物方位に小型住居が従うことも多かったのではないかと想像する。

それに対し、集落において大型・中型住居がみられなくなる一〇世紀以後になると住居方位の規制がなくなり、冬季の北風による竈の煙の逆流を嫌った小型住居では、東竈の住居が増えたものと考えたい。

（佐々木義則）

文献　浅川滋男二〇一三『建築考古学の実証と復元研究』同成社／君島武史二〇二〇「上屋構造を考える―北上盆地の竪穴建物から―」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』第七号、北上市立埋蔵文化財センター／佐々木義則二〇一〇「武田遺跡群からみた奈良・平安時代の集落」『武田遺跡群総括・補遺編』ひたちなか市教育委員会ほか／菱川淳子二〇〇八「栃木県の焼失竪穴建物」『日本各地・各時代の焼失竪穴建物跡』（本文・図版編）奈良文化財研究所／宮下孝優二〇一六「古代・竪穴建物の構造変化」『東京考古』第三四号、東京考古談話会

横穴墓を歩く 30

熊本県玉名市

石貫ナギノ横穴群

末永　崇
（玉名市教育委員会）

熊本県北部の菊池川下流域に位置する玉名市は、全国的に装飾古墳が多く所在する地域として有名です。国指定史跡の大坊古墳、永安寺西古墳・永安寺東古墳、石貫ナギノ横穴群、石貫穴観音横穴などがあり、大正一〇年三月に石貫ナギノ横穴群、石貫穴観音横穴は、熊本県内のほか装飾古墳とともに、日本初の史跡指定となりました。

石貫ナギノ横穴群は、菊池川の支流、繁根木川右岸の丘陵東側に所在し、阿蘇溶結凝灰岩の崖面に南北約二五〇ｍの範囲で四八基の横穴墓が確認されています。丘陵西側には石貫穴観音横穴五基が所在します。横穴群は配置などでいくつかのグループに区分され、部分的に崩落しているところもあることから、埋没しているものも多いと推定されます。早くから開口しており、副葬品はほとんど残っていません。丘陵上には石貫熊野坐神社がありましたが昭和初期に火災で焼失し、移転しました。現在も神社の区画が残されており、また凝灰岩製の舟形石棺もあることから、古墳があったのを後世に神社敷地として造成されていると考えられます。

横穴群は、おおむね六世紀代を中心に造営されたと考えられ、中でも特に六号墓と八号墓の規模が大きく、造りも丁寧で、円文などを組み合わせて赤などで彩色した飾縁が特徴的です。六号墓は二重の飾縁をもち、外側に同心円文を連続して描き、赤で彩色されています。内側の飾縁には円文を連続して赤で描かれています。横穴墓内部は「コ」の字型屍床と呼ばれる、遺体を安置する場所が奥と両側の三ヶ所ある構造です。八号墓は、飾縁に円文と菱形文を組み合わせた図柄を描き、赤などで彩色されています。規模は、飾縁の高さ二・一ｍ、幅二・八ｍ、玄室の前長二・五ｍ、高さ二・〇ｍです。内部は六号墓と同様、「コ」字形屍床で、奥壁には家の屋根を模したような形態の石屋形が表現されています。石屋形の奥壁にも円文と連続三角文が線刻されており、さらに石屋形左側には大刀が浮き彫りされているなど、多彩な装飾があります。

写真１　石貫ナギノ横穴群
（左側：６号墓・中央付近：８号墓）

写真２　石貫ナギノ横穴群８号墓

写真３　石貫ナギノ横穴群８号墓内部

図１　８号墓実測図
『熊本県装飾古墳総合調査報告書』より転載

縄文時代に形成される貝塚は、当時食べた貝の殻や、動物の骨などの食料残滓が堆積してできた塚ですが、それ以外にも、不要になった土器や石器、装身具なども含まれています。今回の展示では、貝塚から出土する装身具の一つである『貝輪』に注目。市内の出土資料を中心に、貝輪に使用される素材や製作方法を、最新の研究を踏まえながら解説する展示を行いました。

貝輪の製作方法

貝輪は「素材」「穿孔」「敲打（孔の拡張）」「研磨」の4つの段階を経て製作され、それに伴う遺物が貝塚から出土します。一つ目の「素材」は、貝を採集してきたままの未加工の状態です。次の「穿孔」は貝の内側から、敲石で孔をあけた状態です。貝は外側からの衝撃には強いですが、内側は数回敲くだけで孔をあけることができます。さらに、「敲打」では、孔を腕が通る大きさになるまで、同じように敲石で割り落としていきます。最後の「研磨」では、孔を広げた部分を、砂質の砥石で水につけながら研いでいき、破面を滑らかに仕上げていきます。縄文時代には、このような工程を経て、貝輪が製作されたと考えられています。

市内の貝塚と貝輪

市内には一七カ所の貝塚があり、分布を見ると、中丸川沿岸には前期の貝塚群、大川・本郷川の沿岸には、中期・後期前半の貝塚群、那珂川河口付近には後期後半・晩期の貝塚群が形成される特徴があります。今から約六〇〇〇年前に起こった「縄文海進」により、前期には海が侵食していない台地上に貝塚が形成され、やがて海退が始まると、海岸を追うようにして陸地化していった場所に、貝塚が形成されるようになります。貝輪が出土している貝塚は七カ所あり、三反田蜆塚貝塚では、一九六八年に実施された藤本弥城氏の調査で、ベンケイガイ・サトウガイ製の貝輪を複数確認。さらに13点のベンケイガイ製貝輪を装着した人骨が確認されています。また、上ノ内貝塚では、生息地が伊豆諸島などに限られた、オオツタノハ製の貝輪が出土。その他の、遠原貝塚・宮前貝塚・大田房貝塚・御船蔵貝塚・辰ノ口貝塚からは、製作中に発生する貝片や孔の拡張に失敗し、割れてしまったと思われる資料が出土しています。

貝輪の素材

貝輪に使用される貝には、アカガイ、サトウガイ、ベンケイガイ、アカニシ、イタボガキなどがあります。これらの貝は、外洋に面し、水深が深い場所に生息しています。当時人々が採集困難な場所へ採りに行っていたと考えるのは難しく、貝輪に使用する貝は、主に海岸に打ちあがる、死殻を採集していたと考えられてます。

また、その死殻についても、化石である可能性が指摘されています。茨城県美浦村の縄文時代前・中期の大谷貝塚から出土したアカガイは放射性炭素年代測定が実施され、約四万二〇〇〇年前という結果が得られています。この年代は更新世後期（約一二万六〇〇〇年～一万七〇〇〇年前）と呼ばれる時期です。縄文時代前期は、約七〇〇〇年前と考えられており、測定されたアカガイの年代は遥かにさかのぼります。霞ケ浦周辺には、更新世に堆積してできた「木下層」や「清川層」といった貝化石を含む地層があり、最終氷期が終わり、温暖になった完新世での「縄文海進」により、露頭の貝化石が波により洗い出され、海岸に打ちあがり、それを採集して貝輪に利用していたのではないかと考えられています。現代でも、鹿島灘に面する海岸では、海底にある化石層から遊離した化石層の一部とみられる砂粒が付着した貝や、化石を含む礫が打ちあがっているのを確認できます。

（田中美零）

展示風景

いばらきの古墳探訪

今回の遺跡めぐりは、令和五年五月二五日に、虎塚古墳壁画確認五〇周年を記念して、茨城県内の古墳を見学しました。古墳群探訪は、二〇〇九年度の埼玉県埼玉古墳群、二〇一五年度の千葉県龍角寺古墳群、二〇一八年度の栃木県しもつけ古墳群に続き、四回目となります。

見学で訪れた古墳は、大洗町磯浜古墳群、石岡市舟塚山古墳と府中愛宕山古墳、水戸市の牛伏古墳群で、古墳時代前期・中期・後期とそれぞれの時代の古墳を見学することができました。

また、磯浜古墳群と舟塚山古墳・府中愛宕山古墳では、市町の担当者による詳細な解説を聞きながらの見学だったので、参加者からは古墳についての理解が深まったという感想の声が聞かれました。

（稲田健一）

大洗町磯浜古墳群日下ヶ塚古墳での見学風景

当日は何度も古墳に登りました

石岡市舟塚山古墳での見学風景

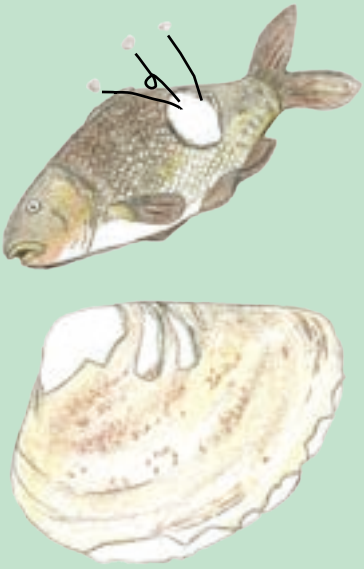
のぞき見展示室 その6

第六回で紹介するのは、貝塚から出土する「貝刃」です。

貝刃は、石器と同様に、貝の復縁を剥離させることにより、のこぎり状の刃をつけた道具です。貝刃に使用される貝は、ハマグリやチョウセンハマグリ、カガミガイなどがあります。貝刃は主に、魚の鱗を剥ぐために使用されたと考えられており、実際に魚の鱗を貝刃で剥ぐ実験をした例もあります。大形の鱗をもつコイでの作業時間は、無刃の貝で最大60秒、貝刃では最大40秒という結果が得られており、刃が付いている方が作業時間が短くなるということがわかりました。

市内では、縄文時代前期の遠原貝塚で一九九四年度に発掘調査が実施され、貝塚から破片を含めて、39点ものハマグリ・チョウセンハマグリ製の貝刃が出土しています。展示室には、三反田蜆塚貝塚から出土した貝刃が並んでいます。

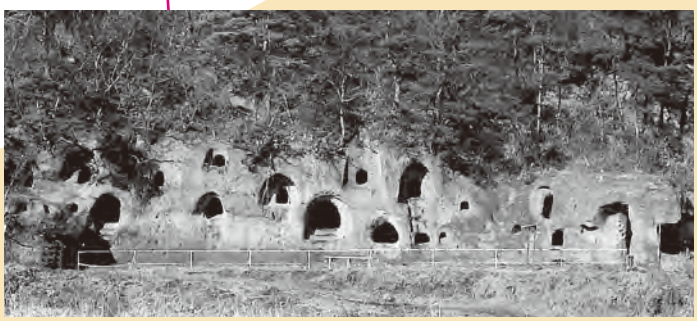
（田中美零）



参考文献　藤本弥城　一九八〇『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』

十五郎穴横穴墓群が国の史跡に指定となる見込みです！

指渋支群では，1976～1980年に市と明治大学が中心となって発掘調査を実施し，119基の横穴墓を確認しました。この調査が十五郎穴では最初の本格的な調査となります。



館出支群の北端は，茨城県指定史跡になっていた場所です。この場所は古くは江戸時代末期の文献でも紹介されています。1924年，この場所で石材採掘のため横穴墓の一部が破壊され，さらに継続採掘される事態が生じました。この事態に対して，那珂湊の大内義比らが採掘反対の要望を提出し，採掘は中止となります。これを契機として，1925年に「保旧会」が組織され，この会は後に「中根村史跡保存会」となり，この会の活動が1940年の県指定史跡認定に重要な役割を果たすこととなります。

このように，十五郎穴は遺跡の保存に対して，昔から積極的に活動が行われてきた遺跡としても評価されています。

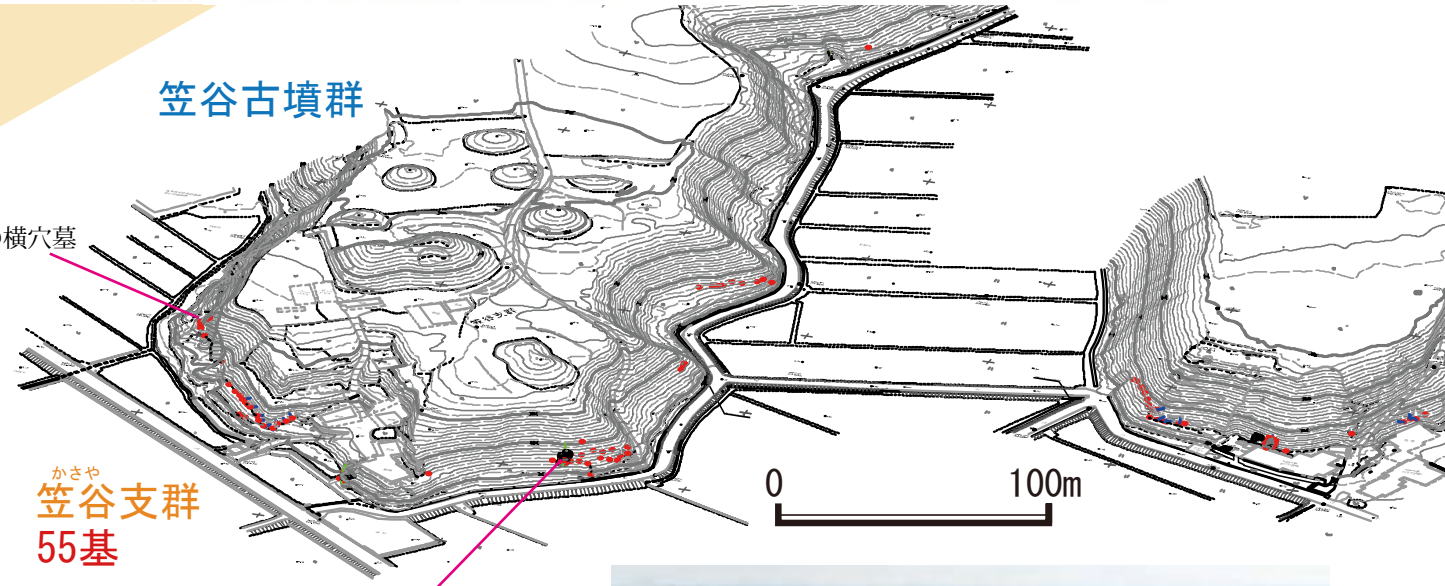
未開口の状態で確認し，入口付近からも大量の遺物が出土した館出Ｉ35号墓

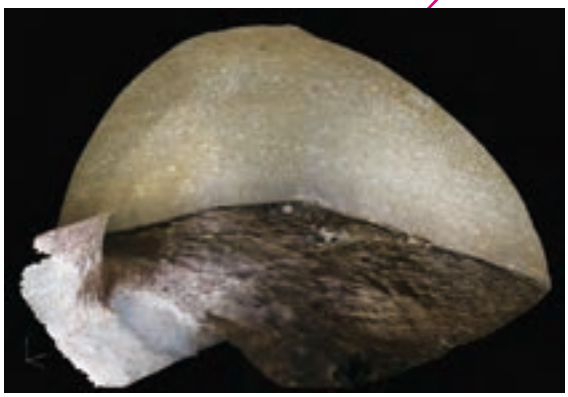
十五郎穴横穴墓群は，古墳時代終末から平安時代にかけて丘陵の斜面に横穴を掘り，そこに亡くなった人を埋葬したお墓です。ひたちなか市教育委員会では，国指定史跡を目指して十五郎穴横穴墓群の範囲や基数を確認するため，2007 年度から 2014 年度まで確認調査を実施しました。その結果，横穴墓が約 1 ㎞の範囲に分布していること，推定される横穴墓の数が 500 基以上（確認した数は 274 基）となることなどがわかりました。この数は東日本最大級となります。

また，調査では，いろいろな形の横穴墓があることから多様な集団の存在が明らかとなったほか，館出支群Ⅰ区第 35 号墓からは県内で 2 例目となる蕨手刀という大刀や，全国で初の出土例となる正倉院の御物に類例がある金銅製の飾りの付いた刀子が出土しました。

以上のような成果から，遺跡の重要性が認められ，2023 年 10 月に国の文化財審議会は文部科学大臣へ国指定史跡への答申をしました。正式な決定は告示後となりますが，ひたちなか市では馬渡埴輪製作遺跡（1969 年指定）と虎塚古墳（1974 年指定）に次いで 3 例目となります。今後は市民のみなさまのご理解とご協力を得ながら，遺跡の保存や整備，活用をしていきます。

館出Ⅰ35 号墓出土の大刀と金銅装の刀子





穹窿形の天井構造の笠谷Ⅴ 13 号墓

十五郎穴横穴墓群地形全景（北から・手前屋根は埋文センター）
＊写真は及川昭文氏より提供

私的茨城考古学外史―遺跡・人　出会いと別れ―

第８回　発掘三昧への道　県外編３

東京都・和歌山県・静岡県・千葉県

瓦吹　堅

まだ東京の池上に住んでいた昭和四三年の五月一六日九時四八分、M7.9の十勝沖地震があり、木造二階建てもかなり揺れた。驚いた私は、青森県三戸町の伯父宅に電話をかけた。いつも青森に行って是川遺跡に行く時は泊まっていたので心配だったが、「揺れたが大丈夫だ」と。

この年、静岡県目黒身遺跡・千葉県滝台遺跡（「埋文だより」54）、東海村平原貝塚・日立市上の台古墳（『埋文だより』56）、土浦市宍塚古墳群一次調査（『埋文だより』57）と大学に通うこともなく、県内外の調査遺跡を飛び回っていた。

昭和四三年九月二九日から一〇月六日の期間、大場研究室助手の椙山林継さんの誘いで、東京都町田市木曽団地遺跡（木曽遺跡群）の調査で掘り残した縄文住居跡一軒の調査に参加した。発掘には林継さんのほかに大学院の小山修三さん、同期の佐藤正好君や一学年下の高林均君等が参加した。本調査では、縄文中期の遺構や遺物が多く出土し、現地のプレハブには接合された土器が所狭しと並べてあった。我々は掘り残された直径五mほどの住居跡一軒を調査したが、中央部に土器埋設炉があった加曽利Ｅ１期のものだったと記憶している。宿舎は遺跡の東側にあるＯ家所有アパートの二階で、食事は三食ともＯ家の座敷で食べた。アパートは寝るだけで何の家具もないため、夕食後はテレビなども見させていただいた。Ｏ家には二〇才から高校一年生までの三人のかわいい娘さんがおり、時々小山さんのリードで洋間でのダンス教室が開かれたが、あの娘さん達も今は古稀前後の年齢だ。当時畑などがあったＯ家周辺の景色は、現在都市化されて全く違うものとなっていることだろう。

木曽団地遺跡の調査が終了し、続いて那智大社の依頼で実施された和歌山県那智山経塚群の調査に参加した。この調査も林継さんの誘いでの参加で、あの那智の滝に向かう参道の左側岩場が調査地で、大きな石の陰には貴重な奉納物等の祭祀遺物が発見された。調査担当は林継さんで、小山修三・金子裕之・佐藤正好・佐藤政則氏等のほかや和歌山県出身の溝本利保君達が参加。小山さんは観光バスが到着するたびに、ガイドさんをつかまえて発掘の状況などを楽しそうに説明していた。

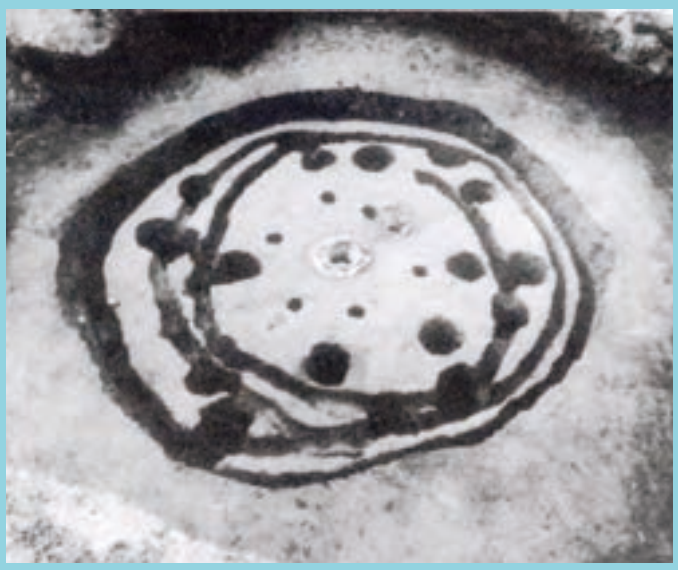
宿舎は大社直営の旅館で、毎晩のように美味しい料理が並び、大場先生が訪問される日はさらに豪華で、和歌山県内在住の先輩達が押しかけ、宴も大盛況。その宴の後、参加していた下級生一人の姿が見えなくなり、我々は慌てて旅館の周囲などを探し回ったが見つからず、部屋に戻ると押入の中から鼾が聞こえ、中で下級生が眠りこけていたということもあった。またある日、那智の滝の滝壺まで行ってみようと数人が観覧所から滝壺へ向かうと、監視所からマイクで呼び戻されたなどいろいろなハプニングもあった。私は写真家北沢広さんの遺物写真撮影の助手をして遺物写真の撮影についていろいろ学んだ。発掘が終わり、土産に缶入りの「那智黒」を数個買い、帰省して

母に渡したら大変喜ばれたことを思い出した。その空き缶は弟達の宝物入れとなり、今でも家の何処かに残っていると思う。

発掘終了後私と正好君は、田辺市の巽三郎先生宅を訪問し、和歌山県内の縄文土器を見せていただき、採拓した。その晩は巽先生宅に泊めていただき、翌朝正好君は京都に向かい、私は奈良駅で政則君と待ち合わせた。待ち合わせた二人は、小雨の中市内観光バスで興福寺・東大寺・若草山などを廻ったが、奈良観光は高校の修学旅行以来だった。その晩二人は、猿沢池近くの旅館に泊まり、遺跡や発掘調査、そして将来などについて語り合って寝た。次の朝政則君と別れ、私は大阪中央区にある薬王寺を訪ねて一泊。この寺は、池上に住んでいた頃お世話になっていた本羽田のM家の親族の寺で、大阪に来た時は是非寄るように誘われていたこともあってのことで、突然の訪問にもかかわらず歓待され、その夜は本堂で寝た。

金子裕之さんは、その後奈良文化財研究所に入所し、私が奈文研研修に参加した一九八二年頃は昼休みにサッカーに興じる金子さんの姿をよく見たが、二〇〇八年三月鬼籍に入られた。

同年一一月、静岡県浜北市（現浜松市）の浜北古墳群の調査に参加。年末の一二月一日から三日の期間、千葉県沼南町（現柏市）浅間山遺跡の調査に参加してほしいと東葛高校の古宮隆信先生から連絡があり、調査現場に出かける。古墳時代中期の住居跡を掘り上げたが、宿舎は地区公民館と記憶している。参加者は、同学年の今泉泰之・昼間孝次君や一学年下の石岡憲雄君らの計六～七名だった。調査が終了すると、古宮先生が柏駅西口の焼鳥屋で打ち上げをするというので、全員参加した。昔も盛り上がると歌が出たがまだカラオケは無く、「月光仮面」「ハリマオ」「東京音頭」などを手拍子で歌ったが、隣で盛り上がっていた東京理科大のグループの歌う歌に負けた。当時、巷には「星影のワルツ」「帰ってきたヨッパライ」「恋の季節」などが流れていたが、我々が当時宴会で歌う歌はどれも古かった。調査に参加していた青森出身の石岡君は、令和四年一月二日、七五歳で鬼籍に入られた。



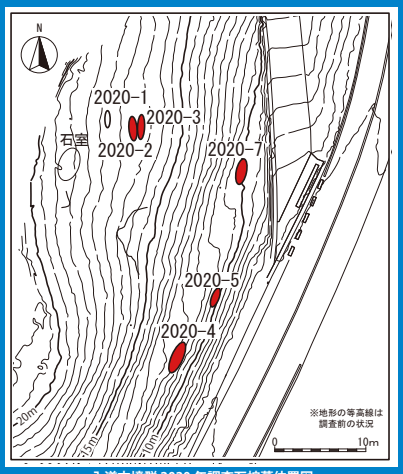
町田市木曽遺跡群の第５号住居跡
（町田市教育委員会提供）

センター駐車場に猿出現！

2023年5月2日

ひたちなか海浜古墳群出土の人骨（1）

国立科学博物館　梶ケ山　眞里



入道古墳群 2020 年調査石棺墓位置図

ひたちなか海浜古墳群は，ひたちなか市の臨海部に所在する古墳群を総称したもので，古くは 1990 年の調査をはじめとして，古墳や石棺から良好な状態の人骨が多数出土しています。出土した一部の被葬者の形質人類学的調査について，[坂上・梶ケ山 2022] で報告しました。ここでは，その調査報告の概要を２回に分けて報告します。

一回目は、二〇二〇年に調査された**入道古墳群出土人骨**について報告する。斜面上部にある2号石棺墓と3号石棺墓は並んでおり、4号・5号・7号石棺墓はさらに下の斜面に設置されている。

【2号石棺墓】

2号石棺墓からは、頭部を北に向け単体の伸展葬人骨が出土している。体格は小さく女性？と判断した。部分的に男性的特徴がある。

頭蓋の上面観の輪郭は比較的幅の広い類卵円形である。頭蓋長幅示数は中頭に属す。頭蓋の三主縫合の鋸歯（きょし）は明瞭で、頭蓋外板では癒合消失箇所は見られない。長高示数（74.9）は高頭に近い。外耳孔は大きな長円形を呈する。乳様突起（にゅうようとつき）は大きく、先端がやや前方向に向く。後頭部の項筋（こうきん）付着面が帯状に隆起し、男性的な特徴である。眉間（みけん）と眉弓（びきゅう）はわずかに隆起している。顔面は狭く上顔示数は狭型に属する。梨状口（りじょうこう）はやや広く、鼻示数は広鼻である。寛骨の大坐骨切痕の湾入は大きく、恥骨のプロポーションは低く女性的である。右橈骨の最大長（210 ㎜）は、古墳時代女性平均値より短く、太さは細い。大腿骨最大長（388 ㎜）は古墳時代女性平均値より短く、骨体の太さは平均的である（80 ㎜）。後面粗線の発達は弱く、骨体遠位端の下間窩（かかんか）は狭い。藤井法による推定身長は 148.0 cm と算定される。大腿骨骨頭窩（こっとうか）は

写真１　入道古墳群 2020 年調査　出土人骨（頭蓋）

表１　入道古墳群 2020 年調査　出土人骨一覧表

遺構名 / 個体名		個体数	残存状態	性別	年齢	残存部位			埋葬状態	備考	推定身長 (cm)
						頭	四肢骨	その他			
2 号石棺墓		1	A	女性？	壮年	◎	◎	○	頭位北 伸展葬	頭蓋骨は男性的、大坐骨切痕湾入鈍角（女性）	148.0
3 号石棺墓	①	3	A	男性	壮年（後半）	○	◎	○	頭位北 概ね伸展葬		158.3
	②		A	女性	壮年	◎	◎	○	頭位北 伸展葬	大腿骨骨体上部超扁平	154.7
	③		B	不明	幼児	○	○	○	集骨？	2 才前後	
4 号石棺墓	①	2	A	男性	壮年	◎	◎	○	頭位北 伸展葬	ダウン症？	157.9
	②		B	男性	青年	○	○	○	頭位南（対位）伸展葬		
5 号石棺墓		1	A	女性	青年	◎	○	○	頭位北 伸展葬	副葬品（鹿角装刀子・鉄鏃）	
7 号石棺墓		1	B	女性	壮年	○	○	○	頭位北 伸展葬		

★ 保存状態 A：良好 B: やや良好　★保存部位 ◎完形のものあり ○完全ではないが部位は保存

＊坂上・梶ケ山報告文献：Human skeletal remains of the Kofun period excavated from the Hitachinaka seaside tumulus cluster, Ibaraki Prefecture (Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. D, 48, pp. 11.28, December 23, 2022)

増殖があるものの、辺縁部に骨棘の形成はない。以上のことから、三〇才代女性と判断される。

【3号石棺墓】

2号石棺墓の隣に並ぶ石棺であり、わずかに3号石棺墓が上（北）方にずれている。石棺内には壮年半ば男性である個体①と壮年初め女性の個体②が伸展葬で埋葬されている。個体③は、二才程度の幼児個体で、個体①の左下腿周辺からまとまっているも、解剖学的配列は保たれていない。

個体①：石棺に埋葬されている人骨のうち右側の人骨である。個体①は、壮年半ばの男性と推定できる。右肋骨は重なり、骨盤の上に右腓骨があるという、おおむね解剖学的配列を保ちつつも、一部に人為的な骨の移動が確認できる。頭蓋は右側頭骨付近が大きく破損している。後頭骨項平面の隆起は顕著であり、幅1cm程度の痕跡を認める。顔面では、右眉弓も顕著である。眼窩上縁は直線的。眼窩形は（示数93.5）正方形に近い。歯の咬耗は大臼歯においてエナメル質は平坦にすり減る。寛骨は良好な状態で残存しているが、左寛骨臼周辺と坐骨底の一部が破損している。左右大坐骨切痕の湾入は強く鋭角で男性的な特徴である。耳状面には細かい気泡があり、関節面は凹凹している。辺縁部には骨棘はない。恥骨結合面上部には骨増殖が顕著に認められる。四肢骨で完形なものは右上腕骨だけである。上腕骨から推定される身長は158.3cmである。三角筋は発達しておらず、骨体は頑丈ではない。尺骨の骨頭は大きく、骨間縁の発達は良好。尺骨および橈骨の最大長は古墳時代男性平均値よりも大きい。大腿骨は骨端が破損し、最大長は不明。骨体（横断示数105.8）は柱状構造が強い。脛骨は両端が破損し、骨体部が保存されている。中央横断面は（示数77.6）厚型である。腓骨は骨体の各縁が明瞭である。下肢筋肉の良好な発達がうかがえる。

なお、頭蓋右側、右上腕骨、右の第3中手骨、第4中手骨、第4基節骨、右肩甲骨、右側上部肋骨はベンガラが付着し、染まっている。

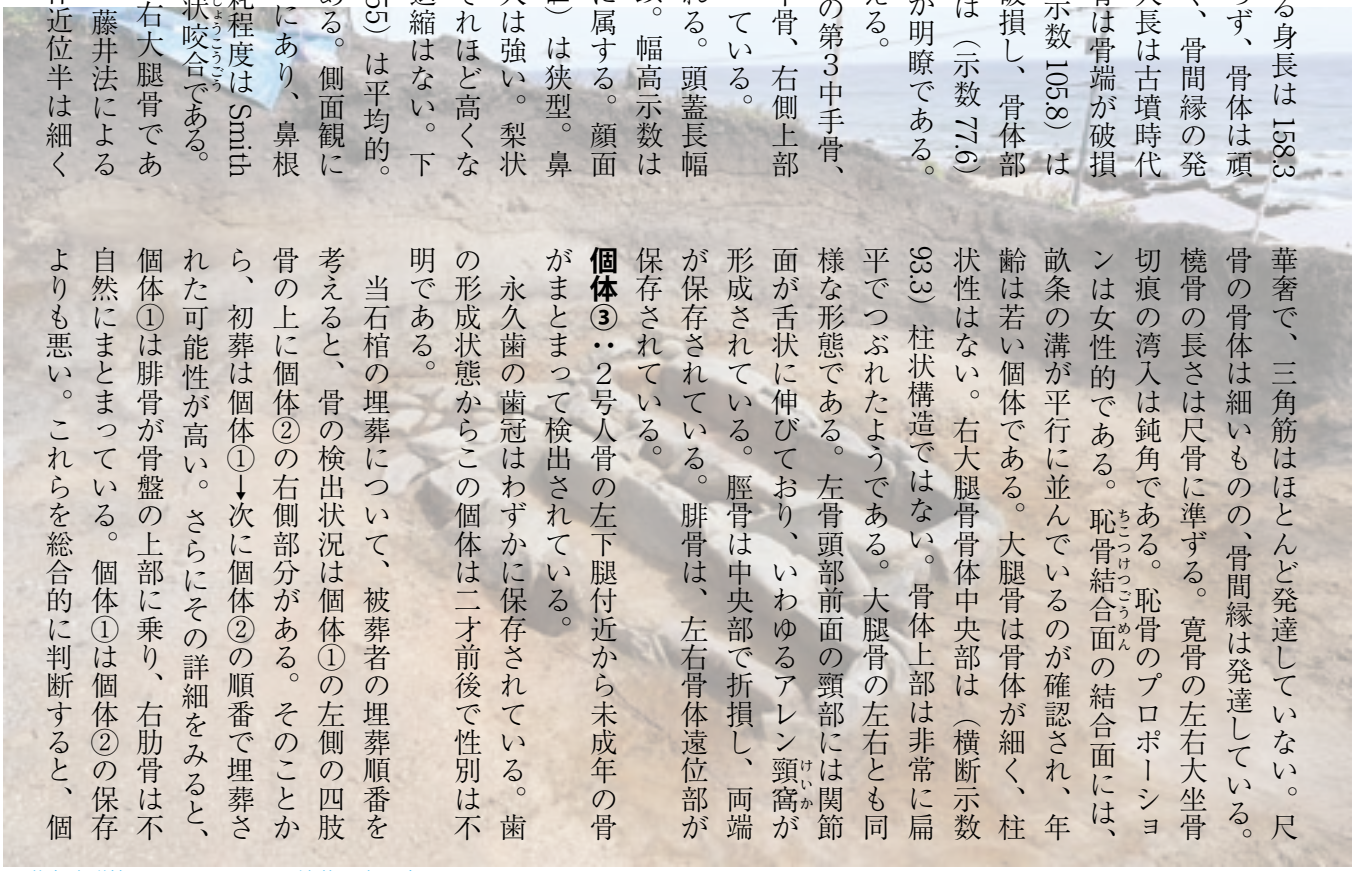
個体②：壮年前半女性と推定される。頭蓋長幅示数（75.6）は、長頭に近い中頭。幅高示数は中型。横前頭頭頂示数は狭額型に属する。顔面骨格はやや狭く、上顎示数（77.4）は狭型。鼻根部は狭く、眉間から鼻背の陥入は強い。梨状口の下縁は鈍である。下顎体はそれほど高くない。歯がすべて植立し、歯槽の退縮はない。下顎枝幅は広く（34.5）、下顎枝高（55）は平均的。本頭蓋骨の顔面骨格は非平坦である。側面観における眼窩外側縁の位置が後方にあり、鼻根部の隆起が顕著である。歯の咬耗程度はSmithのⅢに相当する。咬み合わせは鋏状咬合である。

四肢骨で完形は左前腕骨と左右大腿骨である。そこから推定される身長は、藤井法によると155cmである。左上腕骨の骨体近位半は細く華奢で、三角筋はほとんど発達していない。尺骨の骨体は細いものの、骨間縁は発達している。橈骨の長さは尺骨に準ずる。寛骨の左右大坐骨切痕の湾入は鈍角である。恥骨のプロポーションは女性的である。恥骨結合面の結合面には、畝条の溝が平行に並んでいるのが確認され、年齢は若い個体である。大腿骨は骨体が細く、柱状性はない。右大腿骨骨体中央部は（横断示数93.3）柱状構造ではない。骨体上部は非常に扁平でつぶれたようである。大腿骨の左右とも同様な形態である。左骨頭部前面の頸部には関節面が舌状に伸びており、いわゆるアレン頸窩が形成されている。脛骨は中央部で折損し、両端が保存されている。腓骨は、左右骨体遠位部が保存されている。

個体③：2号人骨の左下腿付近から未成年の骨がまとまって検出されている。

永久歯の歯冠はわずかに保存されている。歯の形成状態からこの個体は二才前後で性別は不明である。

当石棺の埋葬について、被葬者の埋葬順番を考えると、骨の検出状況は個体①の左側の四肢骨の上に個体②の右側部分がある。そのことから、初葬は個体①→次に個体②の順番で埋葬された可能性が高い。さらにその詳細をみると、個体①は腓骨が骨盤の上部に乗り、右肋骨は不自然にまとまっている。個体①は個体②の保存よりも悪い。これらを総合的に判断すると、個



入道古墳群第2020-2・3号石棺墓調査写真

体①が完全に骨化していない時点で個体②を埋葬したのではなかろうか。つまり、初葬の個体①が骨化しつつある中で、個体②の埋葬の機会が生じ、その埋葬空間確保のために個体①の右肋骨を東側にずらしまとめ、軟部が付着した状態、もしくは、交連のままの右半身を浮かし個体②を埋葬したと思われる。そして更に、（理由はともかく）個体①の骨化した腓骨を骨盤の位置に移動している。個体③の幼児骨については、どの時点で埋葬したのか判断が難しいところではあるが、やや散乱した状態で検出されていることから、少なくとも個体②つまり最終埋葬と同時の埋葬とは考え難い。個体①と同時かそれから時間を経た時期と考えられよう。

【4号石棺墓】

4号石棺墓には、伸展葬の個体①、対位の姿勢で埋葬されている個体②が出土した。

個体①：性別は男性。年齢は壮年。

頭蓋の上面観は類五角形で、中頭（長幅示数は76.4）に属する。広前頭に属する。ラムダ縫合は右側の走向は複雑で、縫合骨が確認できる。脳頭蓋の高さは非常に大きく、長高示数は高頭、狭型。眉間や眉弓の隆起は強く顕著である。側面における前頭鱗は前後に短く高く、湾曲が強い。前頭骨から頭頂骨にかけて緩い湾曲である。後面観の中央部は中央部が膨隆し、左右頭頂結節は左右とも強く膨隆する。外後頭隆起は顕著。前面観において最小前頭幅は狭く、頭頂部に尖頭傾向があり、前頭骨頬骨突起はやや下方に張り出す。非常に特殊な頭蓋形である。顔面は幅広く、その顔面は低い。眼窩縁は長軸がやや傾いたやや長方形で中眼窩。鼻根部は幅広く、鼻骨部、上顎骨頬骨突起は著しく平坦である（鼻骨平坦示数0）。つまり鼻骨が欠如している。染色体異常による先天性疾患の可能性がある。梨状口は広く、鼻示数は広型の下限である。下縁は明瞭な稜線はなく骨稜は存在せず、鈍縁である。上顎骨体前面の凸凹は強い。上顎骨は前反傾向が認められる。下顎骨の下顎体は高く、下顎枝幅（33）もそれなりに広く、下顎角は外反し、全体的に頑丈である。咬耗はSmithのⅡ～Ⅲに相当する鋏状咬合である。四肢骨で最大長の計測できるのは、左上腕骨のみである。ここから算定される推定身長は157.9cmである。古墳時代男性平均値をやや下回る。右大腿骨は近位部が破損している。骨体中央部断面は円形で後面粗線の発達はそれほどではないが、大腿骨遠位端の下間窩は広く男性的。

個体②：頭蓋の冠状縫合および矢状縫合は明瞭。左右大腿骨の検出状況から、個体①とは対位の伸展葬で、左右とも第3転子が完全に癒合しておらず、二〇才未満の比較的若い個体であると思われる。骨体中央部は付柱構造が強く、中央部横面示数(117.6)は他の石棺から検出された大腿骨よりも太く頑丈である。また、骨体上部後面は大殿筋粗面の強い凹みが形成されている。また、特徴的な形態として、骨頭が立ち上がり、骨頭から骨体が直線的に連続している。

【5号石棺墓】

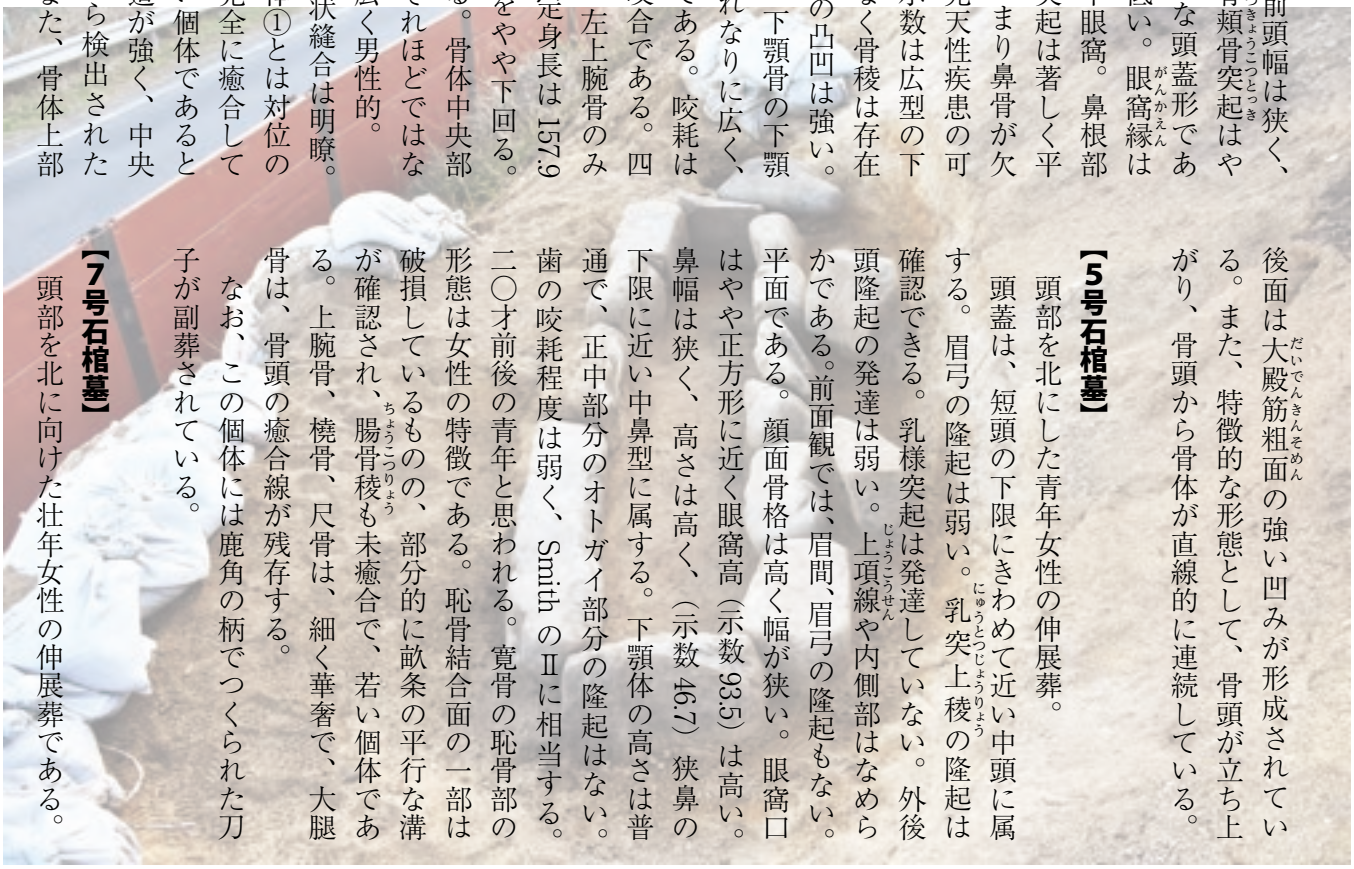
頭部を北にした青年女性の伸展葬。

頭蓋は、短頭の下限にきわめて近い中頭に属する。眉弓の隆起は弱い。乳突上稜の隆起は確認できる。乳様突起は発達していない。外後頭隆起の発達は弱い。上項線や内側部はなめらかである。前面観では、眉間、眉弓の隆起もない。平面である。顔面骨格は高く幅が狭い。眼窩口はやや正方形に近く眼窩高（示数93.5）は高い。鼻幅は狭く、高さは高く、（示数46.7）狭鼻の下限に近い中鼻型に属する。下顎体の高さは普通で、正中部分のオトガイ部分の隆起はない。歯の咬耗程度は弱く、SmithのⅡに相当する。二〇才前後の青年と思われる。寛骨の恥骨部の形態は女性の特徴である。恥骨結合面の一部は破損しているものの、部分的に畝条の平行な溝が確認され、腸骨稜も未癒合で、若い個体である。上腕骨、橈骨、尺骨は、細く華奢で、大腿骨は、骨頭の癒合線が残存する。

なお、この個体には鹿角の柄でつくられた刀子が副葬されている。

【7号石棺墓】

頭部を北に向けた壮年女性の伸展葬である。



入道古墳群第 2020-4 号石棺墓調査写真

頭蓋の縫合の一部が確認でき、鋸歯は単純である。静脈溝の圧痕が顕著である。眉間や眉弓の隆起はほとんどない。右頬骨が破損しているものの、左側から推測される顔面全体の骨格は低く広い印象である。眼窩は高眼窩（こうがんか）（88.9）に属する。鼻根部は平坦である。梨状口は狭鼻型に近い示数（47.4）中鼻型に属する。歯の咬耗程度はSmithのⅢ程度である。下顎骨体の高さは普通で歯槽の退縮はない。下顎角はわずかに外反する。寛骨の大坐骨切痕は湾入が大きく、また左右の恥骨部分の角度が大きいことから、女性である。恥骨結合面の輪郭が明瞭で骨増殖はない。畝条の溝が残存しているので若年と思われる。右鎖骨は前後に扁平である。上肢骨は細く華奢である。大腿骨の骨体周は古墳時代女性としては普通である。後面粗線の発達した柱状構造である。脛骨は扁平脛骨である。

以上、入道古墳群の二〇二〇年の調査では八体の被葬者が出土した。推定身長は男性で158cm、女性で150cmと算定される。2号石棺墓、5号石棺墓、7号石棺墓は女性の単体埋葬である。4号石棺墓個体①は鼻骨が欠損しており染色体異常の可能性が考えられる。（次号『埋文だより』第60号に続く）

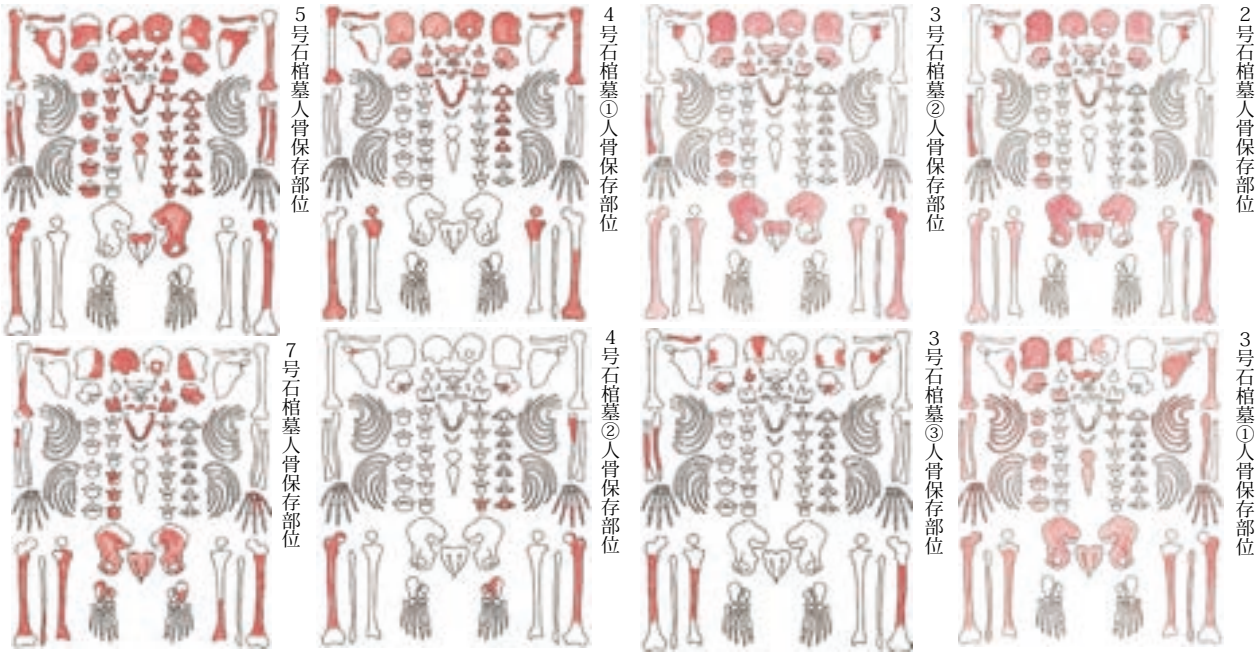


図１　入道古墳群 2020 年調査　出土人骨保存部位

写真２　入道古墳群 2020 年調査　出土人骨出土状況

＊ひたちなか海浜古墳群については，『埋文だより』第 56 号をご覧ください。

＊石棺墓の位置図は有限会社三井考測が製作したものを改変しました。

ワンケース・ミュージアム59は、ひたちなか市三反田の下高井遺跡出土資料見直しの際に発見した、須恵器杯に「大舎人小文」（「小」を部の略字とみれば「大舎人部文」）と書かれた墨書土器を展示しました。

墨書は色が薄く、須恵器と墨の色が似ているので肉眼では見えにくいものでした。そこで水戸市埋蔵文化財センターにご協力いただき、赤外線撮影用カメラで撮影したところ、「大舎人小文」と判読できる文字が確認できました。

この墨書土器は、下高井遺跡二一二号住居跡の南側床面に置かれた状態で出土しました。時期は九世紀前半頃です。踏まれて硬くなった床の範囲からみて南側に出入口があったと推定されますので、この墨書土器を出入り口前の床に置いたまま住居は終わりを迎えたのです。

墨書土器は、鬼や神々に賄いをささげて災いを逃れる祈願に用いられ、記された人名は祈願者の名前であると考えられています。「大舎人小文」（もしくは「大舎人部文」）が災いから救われるように、名前を記した杯に賄いを入れて住居の出入口に置いたのでしょうか。

ところで「大舎人小文」（「大舎人部文」）に似た名前の人物に、「大舎人部千文」という万葉歌人がいます。万葉集は六八〇年ごろから七五九年ごろまでの和歌四五〇〇首を収録した日本最古の和歌集です。万葉集には七五五年に詠まれた常陸国の防人歌が一〇首あり、そのなかに那賀郡の大舎人部千文の歌が二首収められています。

大舎人部氏は一二世紀の頃、水戸市吉田にいたことが『水戸市史』で指摘されていますが、今回の「大舎人」墨書の発見により、より古い時期にひたちなか市三反田にもいたことが明らかとなりました。

今回の墨書土器を出土した住居群は、八世紀初めごろから同じ位置で建て替えられながら継続してきた住居群です。「大舎人小文」（「大舎人部文」）と「大舎人部千文」の名前の類似性をみると、八世紀中頃にこの住居群内のどこかの住居に、万葉歌人大舎人部千文が住んでいたのではないか、と考えたくなってしまいます。

（佐々木義則）

参考文献：井坂敦実『万葉集の筑波山』、田口守『鑑賞茨城の文学　古典編』、茨城県教育財団『三反田下高井遺跡』、平川南『墨書土器の研究』

ひたちなか市下高井遺跡から出土した
「大舎人小文」墨書土器の赤外線写真
（FUJIFILM GFX100IRで撮影）

「大舎人小文」
（「大舎人部文」）
墨書土器

展示状況

文埋センターの日々 2023 前期

4月

-2 虎塚古墳一般公開／2 クラブツーリズム見学／11・14 筑波大学大学院鎌田涼氏資料見学・分析

【磯崎東古墳群出土ガラス小玉など】

／**18-25 金上向山遺跡試掘調査**／18 虎塚古墳石室点検

5月

-7 企画展「弥生時代中期の祈り - 墓から出土する管玉 -」終了／**9-11 高野冨士山遺跡試掘調査**／**9-17 三反田古墳群試掘調査**／**9-12** 展示入れ替えのため標本陳列室一部閉鎖／11 ユーラシア旅行社見学／12 中根小学校3年生見学（下段右写真）

／**24-26 東中根清水遺跡試掘調査**／25 遺跡めぐり「いばらきの古墳探訪」実施・かすみがうら市資料貸出【田谷遺跡瓦】／**27- ワンケース・ミュージアム 58「縄文時代の貝輪」開始**

6月

6-27 田彦古墳群試掘調査／**13-28 市ノ山遺跡試掘調査**／15 菅谷西小6年生見学／**20-29 柳沢十二所遺跡試掘調査**／**20- 大房地遺跡本調査開始**／28 茨城大学出張授業【センターの活動について】

7月

1 茨城キリスト教大学博物館実習実務実習

・千葉県橋本勝雄氏資料見学【柳沢遺跡採集石匙】

／**5 北根A遺跡試掘調査**・茨城大学出張授業【虎塚古墳の保存について】／**-9 ワンケース・ミュージアム 58「縄文時代の貝輪」終了**／**11-13 平磯宮上遺跡試掘調査**／16 愛知県川添和暁氏資料見学【三反田蜆塚貝塚出土骨角器など】／**-19 大房地遺跡本調査終了**／**19-21 高野冨士山遺跡試掘調査**／**20- 金上向山遺跡試掘調査開始**／**22- ワンケース・ミュージアム 59「発見！「大舎人小文」墨書土器」開始**／29 ふるさと考古学①「楽しい考古学1」（講師：さかいひろこ氏）

虎塚古墳花便り 31

キンモクセイ

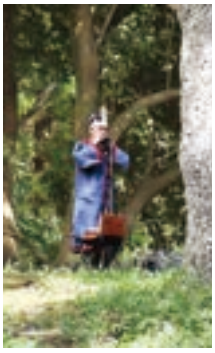
今回ご紹介する花は、甘い香りが特徴の「キンモクセイ（金木犀）」です。キンモクセイはモクセイ科モクセイ属の常緑樹で、東北から九州に生育しています。もともとは中国原産で、江戸時代に持ち込まれ、自然ではなく庭木として広まったとされています。葉は長めの楕円形で、花はオレンジ色の小さな花を枝いっぱいに咲かせて、日差しを受けるとその名のとおり金色に輝いて見えます。花の咲く時期は九月下旬から一〇月中旬です。この花の特徴は何と言っても甘い香りで、遠くまで香りが届くことから「千里香」とも呼ばれていたそうです。

この花は、センターの職員駐車場周辺にあるので、出勤して車から降りると、甘い香りで花の存在に気がつきます。私にとっては、秋の訪れを視覚ではなく嗅覚で感じることができる花です。と同時に、トイレも想像してしまう花です。（稲田健一）

／30 ふるさと考古学②「楽しい考古学2」（講師：さかいひろこ氏・廣水一眞氏・海老原四郎氏）

8月

1-3 二ツ森古墳群試掘調査／8 オープンスペースみらい小・中・高校生見学／16 虎塚古墳発掘調査開始50年記念 いばらき古墳旅マップ編集部主催「ありがとう♡とらづかこふん」開催



／17-18 職場体験（勝田中等教育学校2年生）

／-17 金上向山遺跡試掘調査終了

／20 ふるさと考古学③「虎塚古墳壁画発見物語」（講師：住谷光男氏・さかいひろこ氏）

／22-27・29 博物館実習（茨城大学・駒澤大学・筑波大学・長岡造形大学）

／22-24 柴田遺跡試掘調査・23-26 下高井遺跡試掘調査／27 ふるさと考古学④「虎塚古墳・壁画のワークショップ」（講師：山田茉央氏・山田梨央氏・さかいひろこ氏）

9月

5-12 蜆塚西貝塚試掘調査／-10 ワンケース・ミュージアム59「発見！「大舎人小文」墨書土器」終了

／10 ふるさと考古学⑤「遺跡を守る1 貝塚と横穴墓」（講師：助川諒氏・さかいひろこ氏）

／12-13 原の寺遺跡試掘調査／20-22 地蔵根遺跡試掘調査／26-29 筑波台遺跡試掘調査／30 ふるさと考古学⑥「虎塚古墳のまわりの植物」（講師：小幡和男氏・さかいひろこ氏）

入館者状況（2023.4.1. ～ 2023.9.30）

月	開館日数	個人（人）	団体（団体）		団体（人）		計（人）
4月	26	650	1	(0)	20	(0)	670
5月	26	331	6	(1)	142	(55)	473
6月	26	223	1	(1)	65	(65)	288
7月	26	231	4	(1)	67	(12)	298
8月	27	298	13	(2)	128	(6)	426
9月	26	151	3	(0)	51	(0)	202
合計	157	1884	28	(5)	473	(138)	2357

（）内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び（公財）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『市報ひたちなか』及び下記のホームページでお知らせします。
https://hitachinaka-maibun.jp

編集後記の 虎の子

二〇二三年は、記念の年である。虎塚古墳の壁画が発見されて五〇年、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターが開館して三〇年、十五郎穴横穴墓群が国指定史跡になる見込みになった年、そして個人的な話だが自分が就職して三〇年。こんなに嬉しいことが重なる年は、人生でもそんなに訪れることはないと思う。

私の考古学への道は、小学校五年生の時に虎塚古墳の壁画を見学したことから始まった。今の自分の状況を見ると、その後の人生が決まった瞬間でもあった。そんな人生を決めた虎塚古墳の壁画発見五〇周年という、記念の年に立ち会えることができる幸せを強く感じている。それに加えて、自分も調査に参加し、報告書をまとめた十五郎穴横穴墓群が虎塚古墳と同じように国の指定史跡になる見込みになったことは、言葉に表すことのできないうれしさである。

十五郎穴横穴墓群の史跡整備は、これからスタートする。虎塚古墳同様に、地元の方に愛され、地域の誇りとなる遺跡になるように、今以上に努力をしなければならないと感じる年でもある。

2011.11.09　十五郎穴で調査指導する大塚初重先生

ひたちなか埋文だより　第59号　2023年10月31日発行
編集　公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社　発行　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011　茨城県ひたちなか市中根3499　TEL 029-276-8311　FAX 029-276-3699
印刷　大富印刷株式会社　ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ
50th Anniversary 2023

＊表紙の写真は，ひたちなか市広報広聴課より提供。